

第3回日野市子ども・子育て支援会議（要約）

出席委員 19人中3人出席

欠席委員 森山委員

半澤委員

田倉委員

日 時 平成26年11月27日（木） 18:30～20:30

場 所 市役所5階 505会議室

次第

1 開会

2 会長あいさつ

3 議事

（1）各専門部会報告について

（2）（仮称）新ひのっ子すくすくプランの骨子案について

（3）その他

4 閉会

事務局	1 開会
事務局	2 資料紹介 欠席者の確認 会議次第、委員名簿、資料1.（仮称）新！ひのっ子すくすくプラン個別施策（新規掲載事業等）一覧（案）、参考 各委員からの（仮称）新！ひのっ子すくすくプラン（素案）事前意見、事務連絡 平成26年度第2回日野市子ども・子育て支援会議議事録（委員確認用）、日野市子ども条例ポケット版、日野市青少年健全育成基本方針
会長	会長あいさつ
事務局	<資料1をもとに事務局からの報告>
〇〇委員	<参考資料を説明>

委員の主な質問・ご意見等

・6ページだが、計画の位置づけというものがあるが、ここに日野市の子ども条例を位置づけてほしい。本日、手元にポケット版があるが、これを計画の理念的なバックボーンとして位置づけてほしいというお願いをしている。2点目は素案を市長に見てもらったが、市長からは少子化、高齢化への日野市の対応について、将来像を記載してほしいという意見があった。

委員の意見に「子育ての第一義的責任は親にある」という表現がとってつけたようだという指摘があったが、この表現はかなり昔から子ども関係の法律には盛り込まれている表現である。今の計画、子ども育成支援法、少子化対策基本法をはじめとした法律に記載されている。これは児童の権利に関する条約に由来する表現である。

<児童の権利に関する条約第18条の読み上げ>

ここに同じ表現がある。

日本はこの条約を批准しているため、日本国内でも子ども関連の法律にこの表現が使用されている。

<日野市子ども条例の第6条(14ページ)の読み上げ>

<ユニセフ子ども条例第18条の読み上げ>

これは日本国憲法の中にも表記されているものである。日野市の子ども条例にも、親には子どもを育てる責任はあるのだから、〇〇委員から「冷たい印象がある」とのことだったので、ここに関しては修正も考えたいと思う。

→質問の大きな論点は、「親の第一義的責任」ということだが、子ども子育て支援法以前のことをお話しいただいたと思う。「親育ち」、「子育ち」については事務局も子ども子育て支援法の視点に立って順番を決めた次第である。

・子どもに絡む条例で「親の第一義的責任」がうたわれており、前回親が前に来ることにどのような経緯があったかということだが、順番との兼ね合いもあったかもしれないが、それでも気にかかる部分がある。聞いていて気になったのは、親が責任を持っていくべきであるという当然のことに関して、〇〇委員から話があったように、子どもはみんなで育てるものということが感じられるものであっても入っていてもよいのではないか。最近、子どもの虐待などの悲しいニュースがある。何回か訪問に行くのだが、保護者がいればそれ以上第三者は立ち入れないところに、親が一番責任をもっているから、それ以上立ち入れないということになってしまっているのではないかと懸念がある。第三者から見て、状況から判断して保護者に責任があるとしても、その保護者の子どもが守られるべきと判断されれば、保護者の責任はおいても地域や行政がその子のことを守る、真剣に考えるということがあったらいいのではと思う。親の責任が強いのが一番だが、それがかえって弊害というか、みんなで子どもを守りたいということの足枷になってはいないか、ということが気になっている。

・「責任」という言葉が前面に出てしまうとそうなるのかなと思う。幼稚園に来る母親によく言うことだが、この少子化の中でよくやってもらっていることはとても幸せな

ことである。私たちも一緒に知恵を出し、寄り添ってみんなで育てていこうと伝えている。ただし、子どもを育てる主役は母親だと言っている。「第一義的責任」という言葉を使うと、拒絶するかもしれないが、主役は母親で、そばで教えるべきと伝えている。なので、そのことがわかるようにした方がいいのではないかと思う。言葉が難しいから拒絶してしまうのではと思うがどうか。

・〇〇委員から教えていただき勉強になった。やはり法律は大きなもので、その中で行政の仕組みがあるということは十分承知しているが、そのような考えもあると納得した。〇〇委員がおっしゃったように、親に責任はあると私も思うが、それは子どもに対する責任であって、子育てをするときには親だけではなくてやはり「社会の子ども」という言葉があるように、幼稚園であれば園長先生、子育て支援のNPO、父親も一緒に、みんなで子どもを育てていくものである。子育ての分類であまり親の「第一義的責任」というものを前面に出してしまうと、何もできなくなってしまうという感じがする。親は過大な責任を負わされており、そうでなくても親は孤立して息切れしている。親を追い詰めるような子育て支援の計画よりは、親に子育ての責任はあるが、みんなで育てていこう、という雰囲気のある計画であればいいと私は思う。

・「第一義的責任」という言葉が強いということもそうだが、基本理念の順番のことだが、条約についても、条例についても、親が基本であるということ、親に第一義的責任があるとうたわれているからという理由では、プランにおいて「親育ち」が一番上に来ることにはならないのではと思う。やはり子どものためのプランなので「子育て」が一番上であるということと、親に責任があるということは違うのではないか。親に第一義的責任があるから、「親育ち」が上に来るのは、プランをつくる上で理解できない。

・ケーキの一番上が「親育ち」なので次世代、地域が親を育てていくというように見えてしまう。

・「次世代育ち」が一番下というのもよくわからない。一番上にあるのは子どもの方が良いのでは。

・ケーキ型のことと、50 ページの概念図がわかりにくいという話をしたが、これはどうか。

→縦軸は年齢、横軸は社会的広がりとなっている。今回、基本目標として4つの視点「親育ち」、「子育て」、「地域育ち」、「次世代育ち」というカテゴリ分けをしている。これを分かりやすくというところから入っている。基本的には、前期計画にも使われている部分ではあるが、やはり年齢と社会、地域というところでカテゴリ分けをした方がいいのではないか。特に「次世代育ち」の部分で、「子育て」に含まれるという指摘についてはその通りだが、「次世代」の定義について、誰が「次世代」なのかということが分かりにくいということで、中高生を主体と位置付けた。ニーズ調査でも、日野市の特徴として中高生に調査をしている。そのことも含め、人の育ち、社会との関連の中で表現している。

・次に、ウェディングケーキのところだが、これは前期計画にも記載されている。上に乗せたかったというわけではなく、特にこれにこだわっていない。バランスが良いというか、

縦に一本柱がなくても良いし、何か狙いがあってできたものではない。指摘を頂いたところで修正はできると思う。

・この会議はちょうど一年になる。子ども目線で考えている人、親の目線で考えている人、全体を見ている人で考えが合わない。ケーキ型がいけないということについて、行政的に言えば、上の方の施策が子どもに関わっており、金と人とモノが集約されるということになるのだから、きちんと担当者が説明すべき。下の方は薄く広く市民全員でやろうということ表現したかったのでは。これはあちこちから切り貼りしているのであろうから、担当者がきちんと説明してほしい。

1億2,000万人のうち日野市は18万人である。7,000億円のうち、いくら配分されるのかということが、本来は予算説明と達成目標がつくが、日野市のプランにはついてこないことが多い。だから机上の空論に終わっている。子ども論も、親論も時間のある限りそれを議論すべき。

・この資料を頂いたときに、〇〇委員と同じように、このように具体的にになったのかと思ひ、すごいという印象を最初に受けた。50ページの基本理念を見て、はじめは〇〇委員のおっしゃるように、違和感があったが、読んでいくうちに皆さんの言うことが一番下の3行、4行くらいに社会が子どもに寄り添うこと、子どもの子育て、子どもの成長に喜びや生きがいを感じることができるよう支援をしていくことが必要とまとめている。なので、途中は難しいが、要約されるとそうなのかと自分の中で納得した。実際、見ていると法律などがわからないので〇〇委員が子どもの条約について説明をしていたように、ベースとしての条約などを余白の部分でよいので載せてもらえば難しい言葉でも理解できるのでは。子どもを産んで育てるのに何かの条約が方に乗っかっていると考えてはいない。対馬委員もそうだが、親の責任や、保護者の育児を肩代わりするわけではないというところを載せられてしまうと、言っていることもきついという印象もあったが、最終的にまとめられていたので私は軽く捉えてしまったが、〇〇委員の説明のようなものがあればもっとわかりやすいというか、柔らかいものになるのではと思った。

・私も手元にプランが届いて見たときに、すごいという印象と、一番主婦目線だと思うが、わかりにくいという印象を受けた。〇〇委員がおっしゃったように、表現は大事だと思う。

→言葉が難しく理解するのに戸惑ってしまうが、みなさんがおっしゃるのを聞いて基本理念の順番について、「子育て」が最初に来て、「親育ち」が次ではないかを感じるようになった。親は子どもがいてこそ親である。子どもが誕生し、子どもが幼稚園に行き、小学校に行き、自分もPTAに参加し、子ども会などに入ることによって地域の活動に参加しているなど、子どもありきの自分である、子どもがいるからこそ親であるということを踏まえ、子どもを中心にお願いしたいと感じた。

・何年前に「次世代育成支援行動計画」というものがあつたが、その時は親育ちということであつた。あの時の私たちの視点には、子どもが主役なのに子どもがどこか抜けていて、親の楽しなどにスポットが当てられていて、穴があると思つていた。さらにその時はサービスというものをよく考えていて親にとってはいいのかもしれないが、本当の親にな

れないというか、楽しい子育て、子育ての楽しさを奪っていると感じた。

今回のプランは、子どもが主役、「子ども育ち」ということが前面に出ていて、本来の姿に戻っており、これを実行すれば素晴らしい結果が得られるのではと考えている。なので子育てをすることによって、親も育つ、親も育てば子どもも育つというところを大事にすべきではと思っている。言葉を少し変えれば良いのではと思っている。

・私たちは小さい子どもと育てているが、親になってもらわないと子育ては難しい。子どもを育てていくことに対しては、母親達にそれだけの責任、責任という難しいことになってしまうが、親と子どもが一緒になって世の中に子どもを送り、育てていかななくてはと思う。「親育ち」も「子育て」も大事なので、順番をどうすればいいか迷っている。

・「親育ち」、「子育て」どちらが上に来るかについては、先ほど〇〇委員から前回の「ひのっこすくすくプラン」後期の時に、親が上に来たというお話をお聞きし、その時にはそうだったのかと理解できた。ありがとう。どっちが上か下かというよりも、市としてはこの方針が、これだけの施策があるということで、親育ちを上を重点的にしているということを理解できたが、名称が「ひのっこすくすくプラン」であることから、やはり「ひのっこ」が中心になるべきだと思う。学校教育基本構想でも、子どもがいて、学校がいて、地域がいてという図式を日野市は打ち立てている。子育て課も一つの大きな枠は同じ方が市民にとってはわかりやすいと思う。子どもがいて、家庭、学校、地域が関連しているという図式の方がわかりやすいのではと思う。なので「次世代育ち」がどうしても腑に落ちず、なぜわざと切り離して出すのかと考えると、プランをつくっていく構造上、そのようにしたかったのではと読み取れてしまい、あまり切り離す意味がないのではと思う。もっと枠は極力大きくしておいて、その中で方針を出すのは良いのだが、切り離すことによってより混乱を招いているような気がする。名前が変わるのかわからないが、「ひのっこすくすくプラン」なのであれば、「ひのっこ」を中心に据えていただきたいし、「親育て」を強調していると「日野市親育て課」になってしまうのではと危惧している。

・私もまだ親である。子どもが32になり、結婚もしたが、私は巣立ったとは思っておらず、いまだに親である。一生親なのではと考えている。前提として、この机を囲んでいる人は対立構造にあってはならないと思っている。市の主張も理解している。私も会社の中で委員会をつくる立場にあるが、すべて公平な立場で、市の主張は、知見のある人から言ってもらったものであると思っている。だが、憲法にしても法律にしても、日野らしくあることが一番いいのではと思っている。前の話に戻ると、これは親が読むものである。子どもを産むのは親である。だから私は間違っていないと思う。子どもを産んだ瞬間に勉強するのは親である。親が一番に勉強しなくては。なのでこの基本理念は私は間違っていないと思う。私も子どもを産んだ瞬間に苦労して、どうしたらいいだろうというところからスタートした。建前は、子どもはかわいいし、親としては子どもを何とかしたい。それから一人前になって、地域にある程度の生きがいを持って一生を終わってほしいというのが、親の夢である。結婚しようがしまいが本人次第だが、でもまだ親であり子どもである。子どもを産んでくれるのは親であり、何より一番不安に思っているのは親である。立場として

の違いはなく、我々親が不安に思っている要素を考えるべきではないか。一番誰が勉強すべきか、何を知るべきかはあり、親がきちんとした存在になり、子どもを育てていく、または育てていくときの形をつくっていく、「次世代育ち」という言葉があっているかはわからないが、そこまで基本目標は間違っていないと思う。

私の子どもは双子であり、母親の苦勞も何分の一ではあるかもしれないが、している。母親だけに照準は当ててはいけないし、父親にも責任があると思っている。

ただ、誰かがおっしゃったように、50 ページと 53 ページの文言も一緒だし、表が矛盾しているので、いる、いないも含めて整合性を出した方がいいのではと思う。

・学校も子どもがいて初めて始まる。子どもに、学校が楽しい、掛け算ができるようになった、逆上がりができるようになったと言ってもらうには、教員が指導力を身につけてはならない。子どもとどう向き合うかということに尽きる。学校から面倒を見てくださいうのではなく、自発的な親の働きかけを常々どの学校も期待して経営していると思う。学校の立場で言わせてもらえば、子どもがいて、親がいる。

子どもの声が騒音という意見がある。どこかの自治体では噴水を止めてしまった。日野市は子どもが安心して遊べる場所だと主張し、噴水を止めない市であってほしい。我々も親がいる。なぜ親が我慢するのか。子どもはどこに行くのか。噴水は止めない日野市であってほしい。アフリカの話からそのようなことを思った。

・詳細に読み込んでいないので言えない部分もあるが、順番については、〇〇委員から学校教育基本構想の説明があったように、誤解があるようだ。学校教育基本構想の中では、最初から子どもが一番上にいて、真ん中に学校があって、一番下で支えているのが保護者であったり、地域であったり、PTA であったりと、このような構造になっている。ただ、プランの作り方では少し違う部分もあるので、それと同じ形をとる必要はないのではと思う。岩本委員のおっしゃったように、権利や条例に引っ張られる必要もなく、みんなで議論した中で進めていけばいいのでは。

子育ての責任についてはやはり親であろうと思う。個人的には「第一義的」というのが刺激的すぎるのではと思う。責任というものをどこかでうたわなければならぬと思うが、その中で、「第一義的」というところを何か他の言い方にすることで、刺激を緩和できるのでは。50 ページの概念図とケーキのものは、下が上を支える土台というようにとらえてしまうので、ここは考えるべきかと思う。

・〇〇委員のお話で、やはり学校というところの基本的性格と、家庭、親子関係は違うので、少し的外れで、考えるベースにはならないのではと感じた。

「第一義的責任」という部分で、法律用語は冷たい印象を与えることが多い。翻訳の仕方にもよるのかもしれないが、「～によれば」のように修飾句を入れるとか、〇〇委員のおっしゃるように「第一義的」という言葉を使わず、言い換える表現にするべきかと思う。行政は法律用語がベースになってしまうので、しかたない部分もあるかとは思いますが。

最近ニュースで餓死する寸前という話があったが、母親だけというわけではないが、若い母親がなぜ産んだわが子をそうできるのか非常に不可解。この問題はまだ解決していな

いという印象を受ける。子どもの権利など、母親になるために、教育をすべきで、カリキュラムを組むべきという意見もある。保健師さんや看護師さんが啓蒙活動を行っており、母子手帳などもあるが、そこから漏れてしまうところが多分にあって、それがショッキングな状態になっている。

子があって親があるということは卵と鶏の話のように、表裏一体のものである。プランを読むのは親であって、子どもは読まない。子どもは親によって、環境によってそのように育っていく。少子化の問題もあり、国に抵抗があるかもしれないが、私は日野市に越してきて30年だが、ここはいいところだと思っている。事務局も色々な意見を参考にして、親の目線に立って、表現も含めて考えていただきたい。できるところは組み入れていってほしい。

・これを読むのは親である。親が読んだときに、日野市がどのような子育て施策をしていて、自分はどんなまちで子育てをするのかと考える。不安だが、ここならやっていけそうという雰囲気を持ってほしい。〇〇委員がおっしゃったように、「主役はあなただが、寄り添うから一緒に頑張ろう」という雰囲気が、にじみ出ているといいと思う。子育ての当事者が読んだときに、ツンツンした感じがあるというのは、〇〇委員もおっしゃっていたが、私もそう感じる。3ページの「家庭での子育て力の回復」で、いきなり読んで、子育て力が低下している、というところから入っている。しかも第一義的責任という話になっているので書き換えの例は挙げていただいているので、それを生かしながら、組み替えながら、こう書けば変わるのではということで私も案に書かせていただいている。まったく否定をしているつもりはないが、ぱっと読んだときに、親が頑張れそうかなという気持ちになれない表現が多いのが気になっている。

子どもも親もどちらも大事だが、日野市では「子育て」は親が主役である。だが、「子育て」は子どもが主役になって、その子どもが育っているからこそ子育てがある、というところが原点ではないかと思う。

基本理念をどう引用するかというところよりも、読んでどう思うかというところで、確かに7ページのところで原文を載せてもらっているが、最初のところで切らずに、最後まで読んでいくと、社会も一緒にやっていくと記載されている。ならば全部引用してもらわなければ、間違った印象を持たれてしまうと強く思う。50ページの引用は、「第一義的責任を有する」で切っている。全体でやると書いてあるなら、日野市がそれを踏まえてどんな施策をしていくかということになるので、どうしても入れなくてはいけないなら、全部入れるべきだと思う。読んで、「頑張ろう」という印象よりも、「自分で頑張れ」という突き放される印象になっているのはみなさんがおっしゃっている通りである。

・「すくすくプラン」ができ、私もこのような形になったことに対して、子育て課の職員の方の努力、労力に敬意を払っており、素晴らしい作業をなさったと思っている。ただ、非常に怖いのが、今回で8回目になるが二か月に一度、二時間の話し合いでこれだけにまとめられてしまうことである。私としても、何か委員として大したことを言っていないのに、これだけのものができてしまうことに恐怖を感じている。私たちの意見は、一つの決めら

れたものに、何か付属品を付けただけではないかという気持ちになってしまうのも確かである。今更ながら言っても遅いし、この会議自体の趣旨が違ったと思うが、この配られた日野市子ども条例は 100 回以上の会議を重ねてつくられていると思うが、この「すすくプラン」に関して、もうすこしじっくりと協議する時間があれば嬉しかった。出た意見も熟されて、〇〇委員がおっしゃる、人間的な柔らかさが出たのではと思う。

理念の順番だが、やはり、序章の中で、少子化を食い止めようとしているが、子どもは減っていく。子どもを産みにくい社会になっており、女性にも働いてもらわなければならない。女性が働いて、子どもを育てていくことができる環境をつくっていくという発想の中では、この「親育ち」は浮いてきてしまうのでは。それがとても嫌な思いがある。誰が見るとか、どの立場に立つということではなく、子どもが育つための、子どものためのプランであるので、子ども条例もそうだが、理念は第3条の「子どもは、ひとりの人間として、人格や個性が尊重されます」という基本から始まっている。「ひのっこすすくプラン」もまず子どもから始まるべき。親が育つということも大事であり、地域も大切である、という順番になっていくのが普通なのではと思う。

・前回のすすくプランについては、時代状況も考えるべきではないかと思う。前回は後期であった。ならば関連をきちんと説明しなくてはならない。国の政策としてあるが、同時に、行政の方に日野市は保護者、市民に伝えていくかということが問題になる。

最初に申しあげたが、ここは我々が意見を言う場であり、決定権はない。我々が意見を述べ、その中で行政がそれを聞くという姿勢によって変わるが、限界はある。自分たちでつくるのであれば、話は別だが、そうではないということを私は最初に申しあげている。そのことを前提にしてほしい。

子どもが中心になる。子どもをどう育てていくかが基本にある。子どもを産んで育ててほしいというのが基本である。実際に親が主役になっていくが、家庭の教育状況を考え直さなければならないと思っている。まず保育士になる人、教師になる人は親への対応、啓蒙もすべきであると思う。そのようなところに力を貸すのが行政であり、国である。全体的に見て、ここは絶対にこうしてほしいということを言うところが、この場である。なのでできるだけ言っていただく、できるだけ入れていただく、ということである。

行政は市民のための行政であるから、行政のレベルを他市よりよくしたいというのがあ。評価されるものをつくりたい。なのでどんどんおっしゃっていただきたい。

・5ページの「計画の策定にあたって」にある後期の計画も前期の計画も含めて親育ちの過程を支援していくというところは、今回も大きく色が残っている。日野市らしい、ひのっこらしいというところを入れたいと思うが、子どもを育てるにあたって、親が育たないといけないということは、切り離せない。どちらが上ということもないが、これを見ると、親育ちの過程を支援するというものと言い切っているために、親をポイントとしているのを感じた。

・どうあるべきという議論というより意見を出すべきということだったが、なぜこのプランができたのかという背景が、少子高齢化、女性の労働力の推進、それからいろいろな情

勢があるが、親の力、責任がベースとして大事ということで、我々親はどのように育て、働き、親としての気づきも自然と学習しなさいと、かなり大変なことを求められているのだと思った。しかし、文面として出して行くのであれば、思いは載せていきたいと思った。

3点疑問点が生じた。

どのように予算が配分されていくのか、載っておらず、これには載せるべきなのか、というところと、プランが機能していくときに、それを監督する機関はあるのかというところである。そして、今後のスケジュールに関して、「作成中」となっているところはいつできるのか、どのような内容のものなのか、というところが疑問である。

→まず財政的な裏付けについて、結論から言えば、これはこのプランには載らない。それぞれ施策体系の中で位置づけられた個々の事業が、当該年度に議会に上げられていく形になる。5か年の計画であるので5年後の財政状況による。

計画が策定された後のチェックだが、本会議がそれを行うと位置づけられている。

「作成中」の項目施策だが、関係各課に事業内容と今後の方向性について調査依頼をかけているところである。既存で行っている事業もある。新規の、現行の「ひのっこすくすくプラン」に入っていないものも合わせて調査しているところである。調査がまとまり次第、スケジュールの話にもなってしまうが、事務局での文言のチェックはさせてもらうが、内容がいつ表に出るかということは、来年の1月にパブリックコメントを出すということになるので、そこで作成中のところをすべて入れた状態で、皆様のご意見を伺う間言うことになっている。

・後期「ひのっこすくすくプラン」の施策体系というのがここにあるが、前は「親育ち」だったが、今回「子育て」がもし上にあつたとき、どのような説明をするのかということがあったが、私はそのような視点を考えていなかったもので、それも大事だと思う。我々にも、市にもどう変えたのかという説明責任がある。その目で後期の体系を見てみると、「親育ち」、「子育て」、「地域育ち」、「次世代育ち」にはなっていないくて一番大きかったのは理念を変えたというところであった。

前期の理念は「あなたとわたし、地域と家族、つなごうつむごう 地球のいのち」となっていた。後期の委員で話し合った時に、よくわからないというところから始まり、結果的には「みんなで子どもを育て、子どもと育つ、つながる地域、つながる心」となり、「つながる」ということが後期の「ひのっこすくすくプラン」大きな理念だったので、それをもう少し等身大にして考えたときに、その中の要素として、「親育ち」、「地域育ち」、「子育て」、「次世代育ち」というものがあるということであった。これを見ると将来像の中の要素として、この4つがある。目標や施策を見ると、親のところは方針がすべて親となっているが、前の時は「子育ての豊かさと楽しさの発見」、「共に生き互いに育てあうまち」、「ひとりひとりが輝く主体的でたくましいひのっこ育て」とあるが、それぞれの中に、子どもが出てきたり、大人が出てきたり、地域が出てきたりとなっている。このような構成では、どれが第一義とかではなく、要素としてこういうものがある、このような施策を行っていくということに委員としてなじみがなかったが、このような形になって、親、子、地域、

次世代となったときに、子育てに対する違和感があった。

私が提案したいのは、階層状のやり方はやめて、後期のプランのように、もう少し柔軟に子育てを考えることができればということである。そのような方向でも検討していただけないか。

→今後のスケジュールとしては、平成 27 年 1 月 1 日の広報でパブリックコメントの募集をする予定である。それまでに今回頂いた貴重なご意見をできる限り反映した形で出していきたいと考えている。募集期間は平成 27 年の 1 月 1 日から 1 月 23 日までという期間を設定している。郵送、持参、ファックス、メール等での受付をする。

次回日程 平成 26 年 11 月 27 日（木）18：30～